

## 『孤独者』一考察

丸 尾 勝

### 一 はじめに

人も眠る夜、葉を落とし尽くした庭の棗の木、チカチカ瞬く夜の空、冷たい夜気に身をすくめる野生の草花、飛び去る悪鳥。と、たちまち、耳にする夜半の笑い声。その笑い声は自分の口から発していたようだ。『野草』の冒頭の『秋夜』（一九二四年九月十五日作）の景である。「耳にする夜半の笑い声」(1)とは何か。なぜ「笑い声」を発するようになったのだろうか。

『孤独者』（一九二五年十月十七日作、第二小説集『彷徨』所収）という作品は、第一小説集の『阿Q正伝』に次いで長く、『彷徨』の中で最後の方に位置し最も長い。『阿Q正伝』は魯迅の変革の意図がよく表された代表作品であるが、『孤独者』は、その『阿Q正伝』を含めてのそれまでの、変革についての総まとめになるような重要な作品で、よって、魯迅にとっても区切りをもたらすような作品であり、この小論はそれらの点について述べる。この作品において、それぞれの系譜を引き継いできた、様々な典型的な人物たちが普遍的な舞台に登場する。その中で主人公、魏連殳は変革を追求し、敗北し、転向する。が、その代償として自分を含めて全登場人物の全的否定をする。そこには、『秋夜』の「夜半の笑い声」を発するほどの魯迅の苦悩がある。

### 二 作品の執筆時の活動状況

『孤独者』（一九二五年十月）の書かれた当時の一九二四、五年頃の魯迅の著

作活動、事件や諸活動を探ってみる。

この時期に魯迅は膨大で多様な著作活動をしている。一九二三年から一九二四年九月まで執筆活動は極めて少ないが、九月から『野草』、十月から『墳』、一九二五年一月から『華蓋集』とまるで堰を切ったかのように次から次へと文章を書いている。一九二五年に限ると、『彷徨』、『野草』、『墳』、『華蓋集』を合わせると六十五篇で、月平均五・四篇となる。しかも、一篇が短いものもあるが、比較的長いものも多い。さらにのちに『兩地書』としてまとめられる許広平との往復書簡のやりとりもある。

さらに、文章形式としても、小説、散文詩、雜感文、往復書簡などと多様で、しかもそれらの内容も複雑である。また、これらの著作活動の他に、厨川白村の著作の翻訳、古典研究、出版活動や出張授業がある。

『華蓋集』の『題記』の冒頭で、たった一年で書いた『華蓋集』（三二篇）の方が足掛け七年かかった『熱風』（三十篇）より作品数が多い理由を小さなことにこだわる習性があるからだ述べている(2)。その小さなことというのは、『文字詮議』や『青年必読書』に関係する事件、北京女子師範大学の事件、教育総長章士釗との確執、《現代評論派》の陳源との論争や五・七記念日に関わる事件、五・三〇事件と多くの事件、論争である。また、一九二三年七月、弟・周作人と仲たがいがいし、八道湾から磚塔胡同へ転居し、翌年阜成門西三条胡同に転居するという私的だが重大な事件もある。

さらに、この北京女子師範大学を巡る闘いの中で教育総長章士釗によって解任させられた教育部僉事の職も忘れてはならない。魯迅は役人なのである。また、教員でもある。一九二五年秋には、北京大学、北京女子師範大学、中国大学、大中公学、黎明中学の時間講師を兼務している。

つまり、多種多様で膨大な量の執筆、翻訳、古典研究、出版活動、役人として

の仕事、兼務の講師の仕事、大学での闘争、身分上での闘争、弟とのもめごと、それに伴う雑務、許広平との交際などがこの一九二四、五年の魯迅の活動である。

『孤独者』の書きあがったのは一九二五年十月であり、このように時間的にも精神面でも多忙の中で二番目に長い小説の『孤独者』が書かれたのであるから、よほど前から構想をあたためていたに違いないと思われる。作品としても、冒頭は葬式に始まり結末は葬式に終わるという構想で伏線がしっかりと張られており、また、後で述べるが、人物、場所、内容の点で集約的、典型的な緻密な設定となっていて、長い間の熟成がこの作品には必要であったと考えられるのである。

### 三 作品の特徴について

この作品の主人公の魏連殳について筆者は『魏連殳（魯迅《孤独者》）についての一考察』(3)で記述した。この小論においても、魏連殳についての記述は欠かせないので、前述の拙論とこの小論と重なる所があり、重なる所は簡潔にした。

#### (1) 登場人物について

##### (ア) 先覚者の系譜、黒の系譜

『孤独者』の作品の主人公、魏連殳は、革命に敗北、挫折、絶望し、苦悩していく知識人である。その魏連殳を中心にして「私」と魏連殳の祖母を配し、さらに、この三人を取り囲むように様々な人物を配置している。

魏連殳が祖母の葬式を出すところからこの作品は始まる。新党かぶれと見られる魏連殳は、旧式のしきたり通りに祖母の葬式をあげ、祖母の孤独な一生に慟哭する。民衆からは余所者扱いされ、保守的知識人グループからは攻撃され、教員の仕事は解雇され窮乏する。期待していたこどもには期待できず、自分に生きることを期待した人も謀殺される。窮乏して追い詰められた魏連殳はこのまま朽ち果てて終わらせないため、自分が生きることを欲しない輩に不愉快な思いをさせようと軍の幕僚

に轉身し、自分が尊敬し主張した一切を排斥し憎み反対した一切のものを実行しようとする。敵側に身を売り、従来の変革の意志を捨て敵のために働くことは、本当の失敗である。が、敵に気づかれずに轉身し敵を欺きとおし、生きることを欲しないもののために魂は屈服せずに生き続け、変革と対立する愚劣な敵の実態を暴露できたことにおいて勝利したと言う。しかし、失敗は失敗で、生きる資格はない自分の身を自分で抹殺する。祖母の遺体の前で慟哭した時と同じように、手傷を負った狼が深夜の荒野に泣き叫ぶようにして、変革者たらんとした魏連殳は悲愴な最期を遂げる。なお、魯迅の言う変革とはこの時期では自我に覚醒して「立人」し、人が人らしく生きられる「人国」を築くということである。

魯迅が日本留学時代に『河南』に寄稿した、『摩羅詩力説』、『文化偏至論』や『破惡声論』に先覚者は多く登場する。『摩羅詩力説』では、摩羅詩派を顕彰し、バイロンを始めとした多くの「先覚者」を紹介し、中国にはこの「先覚者」が存在しないことを嘆く。『文化偏至論』では、文化は偏向するので物質尊重・多数尊重より精神尊重・個人尊重の必要を説き、個人や個性尊重という意味の個人主義を発揮した西洋の「先覚者」（「明哲の士」「天才」「超人」「英雄哲人」）として、ショーペンハウエル、キェルケゴール、イプセン、ニーチェなどを紹介する。そして、これらの「明哲の士」が「外は、世界の思潮に落伍せず、内は、固有の血脈を失わず、今を取って古に復し、別に新しい主義を起して、人生の意義を深遠にしたならば、国民の自覚が生れ、個性は発展して、砂の集まった国は、これにより、一転して人間の国になるだろう。」(4)と、絶望を感じていた中国に期待する。『破惡声論』では、中国の現状を憂い、民衆ではなく、心の声・内なる輝きを持つ先覚者の出現に期待する。いずれも、目覚めない民衆に先覚者を対置して中国にも先覚者の出現を期待する。

覚醒しない民衆に対置する先覚者は、『野草』にも形象される。『復讐』の傍観

する「通行人」に対して枯渇したまま立ちつくす「二人」や、『復讐（二）』の敵意に満ち、先覚者を滅ぼそうとする「群衆」に対する「神の子」である。これらの民衆は、覚醒するどころか一連の先覚者を傍観し、先覚者に敵対し、先覚者の滅亡を願うに至る。一方、苦悩する魯迅を鼓舞するイメージとしての先覚者も形象され、魯迅と対置する。『影の告別』では「影」に対して「君」を、『過客』では黒ずくめの「過客」を、『墓碑銘』では「私」に対して「屍体」をそれぞれ対置する。が、これら一連の系譜の先覚者は姿を提示して対置するのみで、変革の意志は示すが、変革の方向は示さずに終わっている。

先覚者の系譜の中でも、特に変革を実践し、変革を象徴する黒の系譜が刻まれる。目覚め始めた『狂人日記』（一九一八年四月作）の狂人が姿を消された後、『酒楼にて』（一九二四年二月作）では、変革をかつては追及していた、濃い黒々した眉の呂緯甫は自虐的に自分のどうしようもない姿を冷笑する。『常夜灯』（一九二五年三月一日作）の狂人も変革を訴えるも逆に監禁され、こどもにも無視される。『野草』の『過客』（一九二五年三月二日作）の黒いひげ、黒の短衣とズボンと黒ずくめの「過客」は先がどんな所かわからぬまま、ものにとり憑かれたように声に追われて先をただ歩むだけである。『酒楼にて』（一九二四年二月作）の呂緯甫を継承した人物である(5)、『孤独者』（一九二五年十月作）の魏連殳は、呂緯甫と同じく真っ黒いひげ、濃い眉(6)で顔がますます黒くなり、変革を追求し、こどもに期待を寄せる。が、逆に反動派に追い詰められ、こどもにも裏切られ、この社会の変革の困難さを思い知り、苦悩し彷徨し、遂に敗北し転向する。この魏連殳の姿には、『狂人日記』の狂人以来の、言わば、変革を象徴する黒の系譜とも言うべき一連の変革者の姿が描かれている。つまり、変革の追及、体制からの虐待、こどもに対する失望、彷徨、分裂、苦悩に至る変革者の一連の姿が魏連殳に凝縮され、さらに、体制側の一員となり転向し変転する姿までもが描かれている。

なお、この「黒い人」は『故事新編』の『鑄劍』（一九二六年十月作）の「黒い人」に繋がる。この、何もかも知っている、黒いひげ、黒い眼の黒い男は、父の仇、国王を討とうとする主人公の若者・眉間尺を導き、魯迅の筆名の「宴之敖」を名乗って国王の前に現れ、国王を遂に絶命させ、強力でしぶとい敵を打倒する。導いた若者と一緒に目的を遂げる点に系譜の進展があり、敵の打倒が、作品の中ではあるが、成ったのである。

#### （イ）民衆の系譜

魯迅は作品の中で、覚醒した先覚者と対置して、覚醒しない民衆もよく描く。『孤独者』の舞台の設定は「S市」で、『酒楼にて』も同じで、「魯鎮」が『呐喊』の『孔乙己』、『明日』、『風波』、『宮芝居』と、『彷徨』の『祝福』で、計五回、舞台の場所になっている。他に、「故郷」が『故郷』で設定されている。作品の世界と現実世界とむやみに混同してはならないし、フィクションの世界が現実の紹興と一致するはずもない。大切なことは、紹興あたりのような地方をよく舞台として使っていることである。また、人物についても、作品の中の民衆像は紹興あたりの地方で見聞した人物像をヒントにし、材料にしていることが多いということである。たとえば一例ではあるが、上記の『孔乙己』の「孔乙己」は魯迅本家中の類似した人物(7)を、『祝福』の「祥林嫂」は本家の遠縁の伯母(8)をヒントにしていると言われる。魯迅の故郷の近くの出身である馮雪峰は魯迅と対話したことがあり、魯迅が少年時代に農民や下層社会の人々に接し深刻な思いをし、これらの人々を扱って傑作を生んだと回想している(9)。そして、魯迅は『孔乙己』では知識人崩れの悲しい顛末の姿と、憂さ晴らしにそれをあざ笑う民衆の姿を描き出す。『祝福』では悲劇的な生涯を送る寡婦と、寡婦を無意識に悲劇に追いやる民衆の姿を描き出す。こうした描出は「魯鎮」を舞台にした作品だけでなく、他の多くの作品にも見られる。つまり、魯迅は紹興などの地方を舞台にして、自

分の故郷あたりで見聞したことを材料にして、愚かで哀れな覚醒しない民衆の姿を多く描いている。また、描かれたこれらの民衆が救われなければ変革ではないという視点を獲得することになる。

民衆の中には悲劇に追いやられる人物がいる。魏連受の祖母は、旧社会に抑圧され、孤独の中で孤独を噛みしめながら孤独のうちに生涯を終える人物である。祖母は、『葉』の華大媽、『明日』の単四嫂子、『祝福』の祥林嫂、『衰微する線の震え』の老婆などの悲劇の女性と同じ系譜であり、こうした悲劇的人物は魯迅の作品の典型的な登場人物である。また、この作品のタイトルである「孤独者」は誰かと言えば、祖母以外に、祖母と同じように自分で孤独を作り出し、その孤独の中で生きようとしていると「私」に指摘される魏連受もまた孤独者である。「これは昔からこのようだ。」(10)と旧態依然としている他の登場人物たちも旧体制に組み込まれ支配され、巧妙に個々に分断されてしまっているという点で孤独者である。それらを描かなければならない魯迅も孤独者である。

悲劇の人物がいる所には悲劇に追いやる土地の有力者がいる。『狂人日記』の狂人と趙貴翁、『阿Q正伝』の阿Qと趙旦那、『祝福』の祥林嫂と魯四旦那、そして、『孤独者』では魏連受の祖母と十三大人の組み合わせである。悲劇的人物と悲劇に追いやる有力者との組み合わせは魯迅の作品の中で一つの系譜を作り、覚醒しない民衆と変革に反対する有力者が民衆を悲劇に追いやるという典型的な型をつくりあげる。この作品『孤独者』でも、有力者、民衆、悲劇的人物と三種の人物たちがこれまでの系譜を引き継ぎながら登場し、辛亥革命後の希望の持てない状況の縮図をそのまま描出し、悲劇の型を提示する。

その他の民衆は、S市の人々や寒石山の人々である。これらの人々は、旧体制の中で古い考え、習慣、しきたりに囚われて生きる普通の人々である。普通の人々はいつでもどこにでも居る普遍的な存在であるがゆえに、自我に覚醒し、人が人

らしく生きることができるようになる変革の対象の人物群でなければならない。よって、普通の人々を抜きにして変革がテーマである作品を描くことはできない。実際、魯迅の作品にはよく登場する。

(ウ) こどもの系譜

『孤独者』の作品の中では、これまでの作品の中での、こどもと変革者の関係が集約されている。

『狂人日記』では、その最後のところは「人間を食ったことのない子どもは、まだ居るのか？子どもを救え……。」(11)と悲痛な声で終わる。『薬』や『明日』では、未来を背負うこどもが旧社会の迷信、悪習によって殺される。ところが、『常夜灯』では、大人の悪い習性、迷信に伝染したこどもたちが悪の象徴の常夜灯を消せと訴える変革者をやっかいもの、笑いもの扱いをする。『野草』の『頹れゆく線の顫え』にも同じような場面がある。そして、『孤独者』では、純粹で無垢であるがゆえにこどもに期待をかけ、未来を託すことができるという段階から、こどもまでもが悪習に染まりこみ、変革者をないがしろにするという段階までが描かれている。「いや。おとなの悪い癖は、子どもにはないよ。後天的な欠点、君がふだん攻撃するような欠点は、環境がそうさせるだけさ。先天的には決して悪くない。天真さ……ぼくは、中国に希望が生まれるとすれば、この点だけだろうと思う。」(12)と魏連殳はこどもに期待する。が、そのこどもによって魏連殳は「やっつけろ」(13)と言われる。つまり、『狂人日記』から続いた一連の作品の中で描かれた、こどもへの期待やこどもの変革者への迫害という、こどもを中心に据えた進化論流のとらえ方が『孤独者』の作品には集約されて描かれている。さらに、魏連殳はこどもに対してこれまでの作品にはなかった新たな段階に踏み込む。魏連殳はついに敵の軍幕僚になり、自分が尊敬し主張した一切を排除し、憎み反対した一切のものを実行しようとし、こどもにものを施し、犬のほえるまねをさ



せ、頭を床へ叩きつけさせる。魏連受とこどもとは、主人と奴隸の關係に転化する。これがこどもに期待をかけ、後轉向した変革者の末路である。このように、魏連受の姿の中には、『狂人日記』以来の、こどもと変革者との変遷の一連の關係が集約され、さらにその末路までもが描かれ、まとめられている。

魯迅は、進化（発展）しなければならない過程の中に、りっぱな思想・文学もなく、誇る主義・主張もなく、戦士でもなく指導者でもない自分自身を位置づけている(14)。そして、旧体制の中で育った自分の任務を「因襲の重荷を背負い、暗黒の水門の扉を肩にささえて、かれら（こども）を広々とした光明の場所へ放して」(15)やり期待をかける。これは講演の中の話であるが、その魯迅流進化論の内容と魏連受の考えとは酷似している。『狂人日記』以来の一連の進化論は魏連受の進化論に集約されているが、また、その破綻は、また、魯迅の進化論の破綻をも表しているのではないか。

#### （エ）知識人の系譜

『呐喊』『彷徨』には知識人も多く登場する。『呐喊』では、十四篇中知識人（読書人）の生き方の問題として知識人を取り上げているのは五篇であり、『彷徨』では、さらに増えて、十一篇中七篇である。これらの知識人を、尾上兼英氏(16)や東北大学の文史哲研究会の分類(17)を基にしてさらに筆者が修正、追加して変革という基準で分類してみると次のようになる。なお、ここで述べる知識人とは国内や海外で学問を修めた人を指す。

第一種は、『孔乙己』の孔乙己、『白光』の陳士誠で、古い時代の知識人（読書人）で人生の失敗者であり、変革には関わらない。第二種は、『髪の話』のN先生、『端午の節季』の方玄綽、『石鱈』の四銘、『高先生』の高幹亭、で、かつては進歩派であったが、革命が挫折すると、保守的あるいは非進歩的になる。第三種は、『酒楼にて』の呂緯甫、『孤独者』の魏連受で、第二種と違う点は革命が挫折した

後も、なおも苦悩しながら何とか誠実に生き延びようとする変革者である。『狂人日記』の狂人や『常夜灯』の狂人（四爺の息子）は知識人（読書人）かどうかわからないが、旧社会が非人間的であることにはっきりと気づいている。第四種は、『幸福な家庭』の「彼」、『傷逝』の涓生で、理想を追い求めるが、結局、変革を認めない旧社会の現実が立ちのぼることになる。なお、『幸福な家庭』の「彼」だけは変革という基準では括ることができない。

これらの知識人の中で、小説の中で現在も変革を追求する変革者として初めて登場する人物は、『酒楼にて』の呂緯甫とその発展した『孤独者』の魏連殳である。それだけでなく、『孤独者』の作品では、変革を推進する知識人たち、即ち、魏連殳、魏連殳に生きることを期待する人、「私」、学校騒動の「煽動者」たちや「余計者」たちが登場する。また、変革に反対する知識人たち、即ち、「学理週報」の紳士たち、「学理七日報」の人々も登場し、双方は激しく敵対する。これまで第一種より第四種まで個別の知識人像を描いてきたが、この作品にあっては、変革を推進する、魏連殳などの第三種の知識人たちと、第二種であるかははっきりしないが、反変革の知識人たちとの双方の複数のグループの対立が描かれている。

変革というテーマで知識人たちを描いたのは、それだけ知識人の存在が、民衆と同じように重大であるからである。つまり、民衆を変革させて変革を進めるためには知識人の力は不可欠であり、特に民衆を覚醒させていく先覚者は知識人だからである。よって、小説の中に登場する魏連殳や他の知識人と似ている、当時の知識人にその姿や生き方を提示し、方向性を示すことは重要なことである。張效民の『魯迅作品鑑賞分析大辞典』で「注意すべきは、魏連殳のような人物は当時の中国社会の覚醒した知識人は少なくない。」(18)と述べているが、「少なくない」知識人であればその姿や生き方を提示することはより意義のあることとなる。

こうして、第一種、第二種、第三種、第四種と変革をテーマにして『呐喊』と『彷徨

徨』において多様な知識人が描かれている。『孤独者』では変革側と反変革側の知識人の対立の中で、魏連受を変革の系譜を引き継ぐ変革者として登場させ、その変転していく生き方を他の多様な知識人の生き方とともに、知識人の生き方の問題として提示する。

(オ) 「私」と魏連受

魏連受は誰かという議論が盛んで、また、「私」は誰かという議論も盛んである。魏連受はこの作品の最後で転身し、今まで信じてきたものを一切捨て、今まで反対してきたものに賛同し、旧陣営に転向し、自分を嘲笑し苦悶の内に死んでいく。筆者は拙論『魏連受（魯迅《孤独者》）についての一考察』（前掲注3）で述べたように、この最後の一連の行為を多くの研究者の方々は復讐、報復と捉える。魏連受は旧社会と対峙するが、その姿に旧社会と苦闘し復讐する魯迅の姿を多くの日本の研究者は見る。即ち、復讐説と、魏連受は魯迅と見る説の組み合わせである。その反対に、転向し更に民衆に復讐し民衆を愚弄する魏連受を墮落した知識人として痛烈に批判し、その魏連受を冷ややかに見る「私」を肯定的に見て、その「私」に魯迅の姿を多くの中国の研究者は見る。即ち、復讐説と、復讐を冷ややかに見る「私」を魯迅と見る説との組み合わせである。

その「私」は魯迅の小説によく登場する。『呐喊』では『狂人日記』を始めとして、計九作品に語り役として「私」が設定されている。『彷徨』の『祝福』の「私」は祥林嫂の悲劇をもの語る役で、『呐喊』の作品と同じだが、祥林嫂の引き出し役としての脇役の面が強い。『酒楼にて』の「私」は主人公、呂緯甫の旧友として登場し、呂緯甫の長い話の聞き手として脇役を務める。この作品の「私」は特別な人格も思想もない。が、『孤独者』の「私」は、こどもへの見方、世間への対し方や生き方において反対の見方、意見を提出し、議論して、魏連受の思想や境遇を紹介し引き出す役をはたす。「私」は一人の独立した登場人物として物語を展開させる

だけでなく、さらに、主人公、魏連殳を批判する重要な役割を持つ。これらの点はこれまでの「私」にはなかった点である。特に、最後のところで破滅する魏連殳に別れを告げ去っていく「私」は、魏連殳とは別の道を進むが、どういう道を進むかは不明なのでかえって重要な役割を果たす可能性を秘めている。

ところで、魏連殳は誰であり、「私」は誰であるかという議論があり、誰々と考え、推論していくのはよいが、限定すべきではないと考える。ここまで見てきたように「私」は魏連殳という人物を明らかにするために対の役を担っており、魏連殳の存在のために「私」が存在し、「私」が存在しなければ魏連殳も存在せず、両者は片方を欠くことはできない。であるから、魏連殳は誰で、「私」は誰でとは限定して捉えるべきではない。大事なことはどういう人物に形象されているか分析することである。

また、魏連殳という人物は単純ではない。既に述べたように、(1) (ア) では変革者の「黒い人」の、変革の迫及、絶望、転向し敗北するという一連の姿が、(ウ) ではこどもと変革者との変遷の関係が集約されている姿が、(エ) では多様な展開を体験し敗北していく知識人の集約された姿が、これから述べるところであるが、(3) (ア) では魯迅のもうひとつの隠れた側面の魔的な姿が描かれていて、(イ) では自分の挫折、敗北と引き換えに自分自身を含めて全ての登場人物を否定する姿が描かれていて、つまり、魏連殳には多層の面が重なっていることになる。魯迅は「人物のモデルも同様に、専ら一人だけをを用いるようなことはしない。」(19)と述べている。魯迅は意識的に無意識的に魏連殳の中に多層の面を取り入れているのである。であるから、どの面を取り上げるかによって魏連殳は何者であるかが変わってくる。そして、魏連殳は何者かという議論も分かれてくることになる。また、ある面だけを見て限定してしまうことは作品の見方を狭いものにし、ひいては魯迅を小さくしてしまうことになる。永井秀美氏は「連殳は魯迅その人か、あるいは『私』

が魯迅なのか、などにこだわることは、とりもなおさずこの作品のもつ可能性を狭い範囲に閉じ込めてしまうことになる。」(20)と述べている。つまり、前の(オ)で述べたように、魏連受即ち魯迅説と「私」即ち魯迅説の両説も止揚しなければならない。

(2) 設定について

(ア) 現実の一面

この作品は現実の人物や事件を多くの材料にしている。これまでの小説の作品にも一部材料にしているものがある。が、これほど多くの人物や事件を材料にしている作品は他にはない。材料と、それに対応している現実の人物や事件を推測して挙げてみる。魏連受の師は、『朝花夕拾』の『范愛農』で述べられる、『狂人日記』にも登場する革命家・徐錫麟(21)、魏連受の部屋によく遊びに来る若者たちは、郁達夫の『沈淪』をよく読む、革命にはつきものの「余計者たち」(22)、「学校騒動を煽動した」と非難される事件は北京女子師範大学の事件、学校騒動を煽動している数人とは魯迅が起草した『北京女子師範大学事件に対する宣言』(23)に署名した魯迅他六名の人たち(24)、「私」を攻撃した《学理週報》の紳士たちや、転向した魏連受をほめまくる《学理七日報》の人々は陳源氏のグループ・現代評論派、《学理週報》や《学理七日報》は《現代評論》であることが考えられる。「私」への、給料の不払いの事件(25)も、実際の事件としてある。そして、『孤独者』の作品が成った十月の前、九月二十一日に、北京女子師範大学は解散を強行され、他の場所で学校を維持運営しようとする事態になっている。これらの対応関係がはっきりしているものもあり、そうでないものもある。対応関係がはっきりしていても、それらはしよせんは作品の材料である。が、現実にいる敵、味方などの人物や現実にある事件を材料としてこの作品の中に取り込んで闘わせていることだけは紛れもないことである。つまり、北京女子師範大学事件や陳源グループとの確執などにつ

いて、魯迅は作品の外、現実だけでなく、作品の内でも変革に敵対する勢力として位置づけている。そして、変革と反変革との対立、これを巡る知識人の対立という現実問題を、この作品は取り込んで現実の一面を提示している。

### （イ）舞台の設定

この作品の舞台の設定はS市と寒石山である。S市は地方都市で、『在酒楼上』と同じ舞台で、魯迅の故郷の紹興を指しているだろうと考えられる。作品の舞台と現実とは次元が異なるが、ともかく地方都市である。寒石山は初出で、他に、魯鎮が『呐喊』の、『孔乙己』、『明日』、『風波』、『宮芝居』、『彷徨』の『祝福』で、計五回、作品の舞台の場所になっている。他に、「故郷」が『故郷』で、未荘が『阿Q正伝』で、吉光屯が『常夜灯』で、龐荘が『離婚』でそれぞれ舞台の場所となっている。他ははっきりしない。それぞれが具体的にどこを指しているか詮索する必要はなく、作品の舞台の設定としては、悲劇の主人公が土地の有力者や民衆によって虐げられ、黙殺される舞台であればよい。ただし、中国に根底的な変革が起きるとすれば、第三章の（1）（イ）や（2）（イ）で既に述べたように、地方の、普通の民衆のための変革であるから、作品の舞台も普通の民衆がいる普遍的な場所、即ち、普通の地方都市や農山村でなければならない。そのとおり、民衆を主人公にした作品の舞台は全て地方都市か農村か山村かである。この作品、『孤独者』もこれまでの作品と同じく地方都市や農山村の典型的な場所の設定となっている。そして、人物として典型的な民衆が登場し、各所で触れてきた変革の困難さという中国の典型的なテーマを提示している。

### （3）全的否定

#### （ア）魔的なもの

魏連受という人物の中に、中井政喜氏は魯迅の「暗い心情」を、丸尾常喜氏は「鬼魂」を、片山智行氏は「サタンの反抗と行動」を読み取る(26)。筆者もそういうもの、

尋常ならざる意志力でもって人・社会に冷然と反抗・超越し孤高・孤独を目指す魔的なものがあるように思う。魏連受の、人を寄せつけない孤独、七回も見せた人への冷やかな態度、社会を悪く見る態度、主張した一切を撤回し、反対した一切を実行し転向していく行動力の強さ、敵陣の中で堂々と振舞う豪胆さ、一切何も残さず自分を抹殺していく自虐ぶり、全てを否定しさっていく徹底ぶりは、人並み外れた、鬼気せまる、魔的な人物像である。

魯迅の他の作品の中にも魔的なものはたくさん見られる。『野草』の『復讐（其二）』では、十字架にかけられた神の子、その人を磔にする人々、行人の描出。『過客』では、尋常ではない意志力をもって足をひきずりながら前へ進む過客の描出、施しをする人の滅亡を自分の目で見るか、その人以外の全てのものの滅亡を願う過客の描出。『墓碑銘』での、墓碑に書かれた屍体の主の描出。『このような戦士』での、無物の陣に、誘惑に屈せず、どこまでも戦い抜く戦士の描出。『《墳》の後に記す』では梟蛇鬼怪といえども、真の友と言う(27)。李秉中への手紙の中では自分の中に毒気と鬼気があり、除こうと思うが除けないと述べている(28)。そして、自分の中にあるものが、自分の文章を読んだ青年に伝染しないかとしきりに心配する。が、尋常ではない、魔的な力や意志があったからこそ、魯迅は孤独に耐え敵の攻撃に耐え、常に文学面、文化面の最前線に立つことができたのであろう。

作品だけでなく、魯迅自身の考え方、生き方にも魔的なものの資質は見られる。第三章（1）（ア）で取り上げた一九〇七年の『摩羅詩力説』では、人々より反発を受ける摩羅詩派の人々を顕彰し、中国においても超人の出現を期待する。『文化偏至論』では、愚かな民衆に失望し、天才の出現に期待する。天才、超人に強く期待する所に、また、自分自身は英雄ではないとわざわざことわる所に、魯迅に、超人、魔的なものの資質がある。こうした魯迅の魔的な面が、前出の『野草』の『復讐（其二）』、『過客』、『墓碑銘』、『このような戦士』などの人物像と

して現れ、また、『孤独者』の魏連殳像として現れたのではないか。つまり、魔的なものも連綿と続いてきた系譜があり、小説としては魏連殳の人物形成に初めて引き継がれる。

(イ) 全的否定

魏連殳は最後に轉身し、今まで信じてきたものを一切捨て、今まで反対してきたものに賛同し、旧陣営に転向し、自分を嘲笑し苦悶の内に死んでいく。この最後の一連の行為を多くの研究者の方々は復讐、報復と捉える。筆者は、拙論（『魏連殳（魯迅《孤独者》）についての一考察』〔前掲注3〕）で記述したように、復讐、報復という捉え方は誤りではないが、全的否定と捉えた方がより適切だと考える。全的否定とは、魏連殳自身だけでなく、出口を結局見つけることができなかった「私」、他の知識人、旧社会に与する人たち、こどもも民衆も一切の登場人物を提示することにより否定することである。復讐の具体的内容、対象、規模、被害者意識、一人芝居の点や現実との緊張関係からして復讐というには脆弱である。魏連殳の「私」への最後の手紙の中で、「私自身も生きていく資格はないと思うが、他の人は？同じだ。」(29)と全的否定をする。また、「私」が死んだ魏連殳と対面した時、「一切が死のように静かだ、死んだ人も生きている人も。」(30)と二回繰り返されている。これらは全的否定のことばである。また、全的否定という役割がなければ、第三章

(2) (ア) で触れたように、作品の内外で敵と闘っているのに、主人公・魏連殳は敗北し転向し悲哀を誘うだけに終わり、作品の内容として敵にただ全面的敗北を示すものになってしまうのは不都合なことである。全的否定することは、登場人物ばかりではなく登場人物の系譜上にある人物たちも、過去の人物たちも、言ってみればこれまでの様々な人物たちも否定することになる。そして、この全的否定は中国社会の現実としては、人が人らしい生き方ができないという認識を提示し、即ち、魯迅の精神上的の原点である「荒野」(31)に又舞い戻ることになる。が、以前のように



「荒野」の中に埋もれるのではなく、今度は「荒野」を外から眺めることができ、また、全的否定により真の闇の世界を提示することができたのである。

このような全的否定は魯迅にあつては特殊なことではない。辛亥革命後に抱いた「寂寞」(32)には中国に対する果てしない絶望が、即ち、中国に対する全的否定がある。雑文においては中国には希望がないと否定的な言辞が繰り返され、絶望感、寂寞感や孤独感が漂い、「荒野」が居場所となる。『狂人日記』では中国四千年の食人の歴史の否定だけでなく、人はもちろん自分も人を食ったかも知れず、真実の人間がいないと全的否定をする。『阿Q正伝』では革命をしようとした阿Qをニセ革命者たちはのけ者にし、民衆たちは狼の眼よりも恐ろしい眼で見ただけであると全的否定をする。『薬』の華大媽、『明日』の単四嫂子や『祝福』の祥林嫂などの女性が悲劇的な結末を迎え、彼女たちを救助しない民衆や自分の地位や利益に固執する支配者たちを描いて全的否定をする。つまり、全的否定は魯迅にとっては持論の中国観であり、特殊ものではない。

『酒楼にて』の呂緯甫の発展した人物、『孤独者』の魏連受は遂に転向し敗北する。が、その代償として、魏連受自身、出口を結局見つけることができなかつた「私」や他一切の登場人物を否定的に見させる。これまでの小説や雑文の中でも、旧社会に与する人たち、民衆、こどもや他の知識人も否定されてきた。が、この作品では、これまでの否定的人物を含みながら、さらに、執拗に変革を目指してきた知識人、魏連受が新たに加わり、自らを嘲笑しながら自己否定して最期を遂げる。これによって希望は全く失われる。変革を目指した人が変革できず旧陣営に加わり転向したわけであるから。しかし、自分を否定し、全登場人物を否定し、全登場人物の系譜上の人物たちを否定し、旧社会を否定し、さらに、作品の中に取り入れた現実の敵をも否定できた。「破壊なしには新しい建設はない」(33)と述べる魯迅は知っている。中途半端な否定はなにものをも生まないことを。全的否定こそが新しいものを

生む唯一のものであることを。魯迅は既に、呐喊していた時とは異なる。また、彷徨していた時とも異なる。呐喊の中で嘆くのではなく、彷徨の中であがくのではなく、彷徨を彷徨として絶望を絶望として見据えるのである。

#### 四 作品の意義

第二章で、『孤独者』という作品は長い間に熟成された作品であることを述べた。第三章で、(1) (ア) では、魏連受などの一連の変革者の「黒い人」が変革の訴え、彷徨、絶望に至り、さらに、転向し敗北する姿として集約されている形で描かれたこと。(イ) では、覚醒しない民衆もこれまでの系譜を引き継いだ形で描かれたこと。(ウ) では、魏連受とこどもとの変遷の関係や、魯迅流進化論の破綻の経過が集約されている姿として描かれたこと。(エ) では、変革追求し、挫折し、転向し、さらに敗北していく、一連の知識人の集約されている姿として魏連受は描かれたこと。(オ) では、主人公と対等の格にまで発展した「私」と対になっている姿として魏連受は描かれたこと。(2) (ア) では、現実の人物や事件が作品の中に材料として取り入れられ、変革と反変革が対立する現実の一面が取り入れられて描かれたこと。(イ) では、民衆を主人公にした作品の舞台となる場所は全て地方都市か農村か山村かであり、この作品も同じで、これらは変革を起こすのにふさわしい普遍的な舞台であること。(3) (ア) では、魯迅のもうひとつの隠れた側面、魔的なものの姿が描かれたこと。(イ) では、変革を巡って中国社会の様々な典型的な登場人物が普遍的な舞台に一堂に会して中国の縮図が描かれ、自分自身を含めてそれらの登場人物すべてを自分の挫折、敗北と引き換えに否定する姿として魏連受は描かれたことを述べた。

この作品では、中国社会を構成する様々な人物、即ち、悲劇に押し潰される人物、変革を目指す知識人、旧陣営に与する人たち・知識人たち、覚醒しない民衆やこ

どもたちがそれぞれの系譜の流れの上に再登場し、一堂に会する。中国の地方都市、農村山村という普遍的な舞台に、主人公、魏連受は、変革の追及者、全的否定者、魔的な面をもつ者のそれぞれの系譜の人物として登場し変革を追求する。が、逆に追い詰められ、遂に転向し完全に失敗する。が、その失敗の代償として、普遍的な舞台に一堂に会した、それぞれの系譜を持った様々な典型的な人物たちを、自分を含めて全て否定する。そして、悲痛のうちに最期を遂げる。これによって、変革の困難な、出口のない、辛亥革命後の暗黒の状況の縮図を総括として提示する。

第三章の（１）（イ）『民衆の系譜』と（２）（イ）『舞台の設定』で述べたように、中国に根底的な変革が起きるとすれば、それは、名もなきどこにでもいる地方の民衆のためでなければならない。それでなければ、根本的な変革にはなりえず、辛亥革命のようになりかねない。これは、次の段落で述べる個人的無政府主義の考えと合致する。根底的な変革のためには、真の闇を提示しなければならない。真の闇からしか光は生まれない。その中国社会の真の闇を提示し、即ち全的否定をする役割が魏連受である。

拙論『魯迅の「無治主義」について』（34）で触れていることであるが、『兩地書』の、魯迅の許広平宛て1925年5月30日の原信には「个人的无治主义」ということばが見られる(35)。「无治主义」は無政府主義で、魯迅の当時の思想の一部を表している。1921年の『《労働者シェヴィリョフ》を訳して』には「个人的无治主义」、「无治的个人主义」ということばが見られる(36)。「个人的无治主义」、「无治的个人主义」は個人的無政府主義、無政府的個人主義で、魯迅は同じ意味とする。留日時代の著作『文化偏至論』などで述べられる「個人主義」には、個人が自我を確立するという意味と、覚醒していない個人の自我を先進的な先覚者が確立させるという二重の意味がある(37)。魯迅の無政府的個人主義は、この「個人主義」に無政府主義の要素が付け加わったもので、支配や因襲から解放され自我に目覚め「立人」

を図り、人が人らしく生きられる「人国」を目指すということである。さらに、第三章（１）（イ）と（２）（イ）で述べたように、名もなき普遍的な民衆が普遍的な場所では変革を実現することが付け加わる。つまり、普遍的な民衆が「立人」を目指すという内容を含めた「個人主義」である。ただし、魯迅の無政府主義は、「立人」を主眼としたもので、所謂無政府主義の特徴である、反国家、絶対自由の追求や個人の自由な結合による無政府社会の実現は言及していず、また、どのように「立国」、「人国」を図るかというプロセスが示されていない。が、そのプロセスがない魯迅の考えと、革命による国家権力奪取を忌避し直接的に解放を目指す無政府主義とは「立人」という点では一致している。また、両者は普遍的民衆が普遍的な場所で「立人」を目指す点でも一致している。この二点については無政府主義とは言えるが、他の無政府主義の要件は満たしていない。よって、魯迅は無政府主義には近いが、所謂無政府主義者とは言えない。後に、他の強い理由もあるが、上記の『两地書』の「个人的无治主义」は「个人主义」と書き換えられることになる。

魯迅の「個人主義」と「無政府的個人主義」との、この二つの違いとして中井政喜氏は「中国変革のためにその闘争のために表出された〈明〉の部分と、また中国変革の道程において越えがたい障壁を告発した〈暗〉の部分とは、一九一八年以降においては魯迅の『個人主義』と『無治的個人主義』という、一本の剣につく両刃の態を呈する。」(38)と情緒面を指摘する。が、留日時代より各事件の失敗、挫折、絶望が続き、情緒がそれらに当然伴い、それはその通りであるが、前段で示したように思想の内容面でも検討すべきではないか。

魏連殳は魔的な力で自分を含めて全的否定をする。全的否定は、魏連殳自身を含めて一切の登場人物の否定を意味する。そして、この全的否定は変革ができないことを意味する。これは、中国社会としては、人が人らしい生き方ができないという認識を提示することになる。この失敗は、魏連殳の生き方、やり方、つまり、魯迅

の「個人主義」の方法、つまり、個人の先覚者が民衆を啓蒙し覚醒させて「人国」を築くという方法の困難さ、行き詰まりを示しているのではないか。覚醒した先覚者と覚醒しない民衆の対置については、第三章（１）（ア）で述べてきたように魯迅にとっては大きなテーマであり課題であり、作品によく取り上げてきた。民衆はただ覚醒しないばかりか、傍観し、先覚者に敵対し、さらに先覚者の滅亡を願うに至る。魏連受は、進化論を信じ、こどもに期待し、変革を信じ、人のために社会のために一身を投げ出す。が、民衆は起ちあがらず、変革に反対する勢力は依然として強力である。そして、先覚者の存在を許さぬ中国社会が魏連受を失職させ、窮乏させ、追い詰め、死に至らしめる。最後に、「手傷を負った狼が、深夜の荒野に泣き叫ぶような、悲慘のうちに憤りと悲しみを交えたものであった。」(39)と「私」は魏連受の呻き声に近いものを聞く。轉身し悲壮な最期を遂げる魏連受の姿に哀切は禁じえない。が、やはり、敗北は敗北である。この敗北は留日時代より抱いていた「個人主義」の方法、個人の先覚者により民衆を覚醒させ起ちあがらせる変革の方法の困難さ、行き詰まりを示すことを提示しているのではないか。そこには、変革について様々なたゆたいがある。

アルツィバーシェフの『労働者シェヴィリョフ』のシェヴィリョフは暴力で目的を遂げる無政府主義者である。結局官憲に追われ、劇場に追い詰められ、劇場で享楽に耽る観客を無差別乱射する。魯迅はそのシェヴィリョフについて『講演の記録』で、「改革者の受ける迫害、代表者のなめる苦しみは、現在はもとより、——将来も、数十年以後も、多くの改革者の境遇が、やはり彼と似ているのではないか、と私には思えました。」(40)、「奇妙なことに、多くの事柄が中国とまことによく似ているのです。たとえば、改革者、代表者の苦難は言うに及ばず、人に分相応を説く老婆までも、私たちの文人や学者とまったくよく似ているのです。」(41)と出版の動機を述べ、さらに、「シェヴィリョフの臨終のときの思想は、あまりにも恐ろしい

ものです。」(42)、「中国では、これほどまでに一切を破壊しようとする人間はいません。たぶん、いるはずはないでしょうし、私もいてほしいとは思いません。」(43)と述べる。このシェヴィリョフと魏連殳とは、個人として人々のために身を挺するも、逆に人々に無視され、あるいは攻撃され、苦難をなめ、自滅していく点に共通点があり、二人をめぐる状況も同じだと言うのであるから、シェヴィリョフの中国版が魏連殳と言える。無政府主義のやり方を信じ実行するシェヴィリョフとその中国版の魏連殳、彼らの悲痛な叫びや壮絶な最期は、かれらのやり方がどうしようもなく行き詰まったことを意味する。また、改革者の受難は「将来も、数十年以後も」続くという予測どおりであれば、これは困難や行き詰まりではなく、絶望であることを示す。そして、魯迅は先覚者のルソー、シュチルネルやニーチェなどを挙げ、「中国には、こういう人間がなかなかいない。かりにいたとしても、大衆の唾で溺死したに違いない。」(44)と述べている。このことばをそのまま受け取れば、中国には先覚者はなかなか出現せず、いても大衆に殺されることになる。つまり、魯迅の長年の念願であった、「個人主義」のその方法の困難さ、行き詰まりを意味している。だが、魏連殳の行き詰まりをじっと見つめ離れていく「私」の眼がある。また、一切関わろうとしない民衆の姿がある。そして、それらを見つめる魯迅の眼がある。

どのようにすべきか、どうすることもできず、魯迅の心はただ動揺するばかりで、時間だけが経つ。さらに、魯迅はこのような作品を描いた当時、青年の先輩や指導者は信じることができず(45)、先覚者は現れず、自分もまた先覚者になれない。人が人らしく生きられるようにという変革の必要と、前進しなければならないという要請だけは確かにありながら、どうすることもできない。ただ「夜半の笑い声」を発するばかりである。しかし、このような作品を書ききるにより、魯迅としては、変革に関わる中国の現状を総括として提示でき、全的否定により真の闇を苦渋のうちに示すことができた。また、自分の期待していた、進化論やこどもへの期待がど

うやら期待できそうにもないことがわかり、先覚者が人々を啓蒙し覚醒させるという「個人主義」の方法はどうしようもなく困難、行き詰まりになることも思い知ることとなった。が、辛亥革命の後のように絶望の底に深く沈むのではなく、彷徨を彷徨として捉え、絶望を絶望として捉えるきっかけになった。そして、たゆたいながら、迷いながら、複雑な気持ちながら、絶望を踏み越え、長く苦しい彷徨に別れを告げ、言わば魯迅の前期に決別し、今までとは異なるもの、新しい思想を求めていくきっかけとなり、区切りをもたらすこととなった。その役割は、魏連殳に別れを告げ去っていく「私」が担うことになるかもしれない。既に、許広平への書簡（一九二五年五月）で、「彼らは事実において着々勝利を占めるのである。しかしながら、世界は真にかくあるに過ぎぬのであろうか？私は反抗して、ためしてみたい。」(46)と意欲を示している。そして、『孤独者』の二ヵ月後の、『このような戦士』（『野草』所収、一九二五年十二月作）に描かれるように、魏連殳のように、一切妥協しない戦士を求めていくことになる。

注釈

- (1)『魯迅全集』（人民文学出版社1981年版 以下これに同じ）第二卷『野草』『秋夜』163頁。
- (2)『魯迅全集』第三卷『華蓋集』『題記』3頁。
- (3)『魏連殳（魯迅《孤独者》）についての一考察』（佛教大学中国言語文化研究会『中国言語文化研究』第2号、2002年）。
- (4)(37)『魯迅全集』第一卷『墳』『文化偏至論』56頁、56頁。
- (5)『世界文学はんどぶつく』『魯迅』178、180頁（世界評論社、1948年）で竹内好氏が指摘。拙論『魏連殳についての一考察』でも指摘。
- (6)呂緯甫は『魯迅全集』第二卷『彷徨』『酒楼にて』26頁。魏連殳は『魯迅全集』

第二卷『彷徨』『孤独者』『一』88頁。

(7)(8)周遐寿『魯迅小説の中の人物』9、98頁（人民文学出版社、1891年）。

(9)馮雪峰『追憶魯迅』74頁（人民文学出版社、1981年）。

(10)(12)(13)(22)(25)(29)(30)(39)『魯迅全集』第二卷『孤独者』『三』93頁、『二』91頁、『二』92頁、『二』91頁、『四』98頁、『四』101頁、『五』105頁二箇所、『五』107頁。

(11)『魯迅全集』第一卷『呐喊』『狂人日記』『十三』432頁。

(14)(27)(45)『魯迅全集』第一卷『墳』『《墳》の後に記す』282・284、284、284頁。

(15)『魯迅全集』第一卷『墳』『我々は今日どのように父親となるか』130、140頁。

(16)尾上兼英『魯迅私論』『魯迅の小説における知識人』34、35頁（汲古書院、1988年）。

(17)東北大学文学部中国文史哲研究会『集刊東洋学』第十六共同研究『《彷徨》について』118頁（1966年）。

(18)張效民主編『魯迅作品鑑賞分析大辞典』張效民『孤独者』『分析』102頁（四川辞書出版社、1992年）。

(19)『魯迅全集』第四卷『南腔北調集』『私はどうして小説を書くようになったか』513頁。

(20)『野草』第五十九号（中国文芸研究会、1997年）〈五〉94頁。

(21)『魯迅全集』第二卷『朝花夕拾』『范愛農』310頁、『魯迅全集』第一卷『呐喊』『狂人日記』429頁。なお「生きることを期待した人」を許広平とする説があるが、採用しない。

(23)『魯迅全集』第八卷『集外集拾遺補編』『北京女子師範大学事件に対する宣言』425頁。



- (24) 上記(23)の署名によれば「馬裕藻、沈尹默、李泰棻、錢玄同、沈兼士、周作人」の六人。
- (26) 中井政喜『魯迅《孤独者》覚え書』（『名古屋大学中国語学文学論文集』三、1979年）101頁、丸尾常喜『復讐と埋葬—魯迅《铸劍》について—』（日本中国学会報第四六集、1985年）203頁、片山智行『魯迅のリアリズム』『第三部 作品の世界』『第二章《彷徨論》』（三一書房、1985年）335頁。
- (28) 『魯迅全集』第十一卷『書信』『李秉中へ』（1924年9月24日）431頁。
- (31) たとえば、『魯迅全集』第一卷『呐喊』『《呐喊》自序』417頁「果てしれぬ荒野に身をおいたよう」、第二卷『野草』『復讐』172頁「広漠たる曠野」、同『頽れゆく線の顫え』205頁「無辺の荒野」など。
- (32) 『魯迅全集』第一卷『呐喊』『自序』417・418頁。
- (33)(44) 『魯迅全集』第一卷『墳』『再び雷峯塔の倒壊について』192、192頁。
- (34) 『魯迅の「無治主義」について』（佛教大学中国言語文化研究会『中国言語文化研究』第9号、2009年）。
- (35) 『兩地書真蹟』90頁（上海古籍出版社、1996年）。
- (36) 『魯迅全集』第十卷『《労働者シェヴィリョフ》を訳して』166頁。
- (38) 中井政喜『魯迅探索』180頁（汲古書院、2006年）
- (40)(41)(42)(43) 『魯迅全集』第三卷『華蓋集続編』『講演の記録』すべて357頁。
- (46) 『魯迅全集』第十一卷『兩地書』『二二』74頁。